

## 周南市大津島における無形文化に関する一考察

—わらべ歌を事例に—

### A Study of Intangible Culture in Odushima, Shunan City

—Case study of WARABEUTA—

中嶋克成・寺田篤史

#### I. はじめに

国土交通省の調査によると、昭和30年から平成17年まで全国の人口は4割増加している一方、離島の人口は5割以上減少しており、島嶼部における過疎・高齢化は近年大きな問題になっている。瀬戸内海の島である周南市大津島も人口640名（H7）から182人（R2）と7割以上減少しており、過疎・少子高齢化とそれに伴う地域文化の継承に大きな課題を有している。

そこで、本稿では、数ある大津島の文化の中でも大津島島民へのインタビュー調査から表出した文化のうち「長持唄やわらべ歌、舞踊などの芸術文化」について調査した内容を報告する。特に学童期の子どもの居住していない大津島の子ども文化である「わらべ歌」をもとに地域文化の継承について考察を行うことで、島嶼部や中山間地域での文化継承について検討する。

本稿は以下の通り構成されている。

IIでは、本研究対象地である大津島の地域文化について、フィールドワーク、文献調査、インタビュー調査から表出したものを列記している。IIIでは、大津島の地理的特性について記述している。IVでは、大津島の子ども文化である「わらべ歌」の調査結果について記述している。Vでは、今回の結果の総括と地域文化の継承の課題について記述している。

#### II. 大津島の地域文化について

大津島の代表的な地域文化には、以下のようなものがある。

##### (1) 回天、砲台跡などの戦争遺産

大津島にある人間魚雷「回天」の訓練基地は、全国に4か所設置された基地のうち、最初期に設置された基地である。大津島にはその回天訓練基地が現存しており、当時の基地の点検試験場、魚雷見張所、点火試験場等を見学することができる（中川ら、2010）。また、回天訓練基地に付設された

「回天記念館」には、当時の資料等が展示してある（写真1）。



写真1. 回天記念館（著者撮影）

##### (2) 石柱、大坂城石垣などの土木建築関連

大津島とその隣の黒髪島では、中世以前より花崗岩が採掘されており、大坂城の石垣の修築工事の際には、大津島の花崗岩が一部用いられたとされている。大津島島内には当該石材を用いた石柱が数多く存在している（前田ら、2021）。



写真2. 石柱（著者撮影）

##### (3) 農業・漁業、食等まつわる文化

大津島は、半農半漁の就業文化が形成されている。四方が海に囲まれているため、漁業は重要ではある（写真3）。しかし、平地が少ない地形であるにも関わらず、農業が主たる

産業となっている。川のない島であるため稲作には不向きであり、麦や甘藷が主要な農産物となっている。また、島で多く栽培されているスダイダイは現在、大津島の名産品となっているが、島には平地が少なく山の頂上まで段々畑を開いても人口を支えるには不十分であったという。



写真3. 島の漁業（著者撮影）

#### (4) 長持唄やわらべ歌、舞踊などの芸術文化

大津島では、長持唄やわらべ歌、舞踊などの芸術文化も数多く伝承されている。

例えば大津島（馬島）にある「葛原神社」では、例祭時には神楽和歌を奉納する（写真4）。例祭では、初めの口上に続きそれぞれが和歌を詠む。和歌を詠み終わると、神楽の舞が始まり、観衆は舞主に対して「エエマイノー」等の掛け声をかける。



写真4. 神楽和歌の残る葛原神社（著者撮影）

#### (5) お遍路・神社仏閣などの宗教関連文化

また、大津島には、お遍路・神社仏閣などの宗教関連文化が多く存在している。特に、馬島・柳ヶ浦地区にはあわせて数十の祠が点在しているが、聞き取りの結果、祠はおおよそ4種に分類できる。第一が、「お大師様（四国八十八箇所遍路）の札所」、第二が「ジジンサマ（地鎮）：家屋の端に戸が閉じられ、家側を向き開かない構造で置かれている」、第三が「厄除け（厄年等に奉納する）」、第四が「土着信仰（火の神様、竜神様）」である。とりわけお大師様は数が多く（写真5）、祭りも行われているものの、記憶が失われつつあ

る。

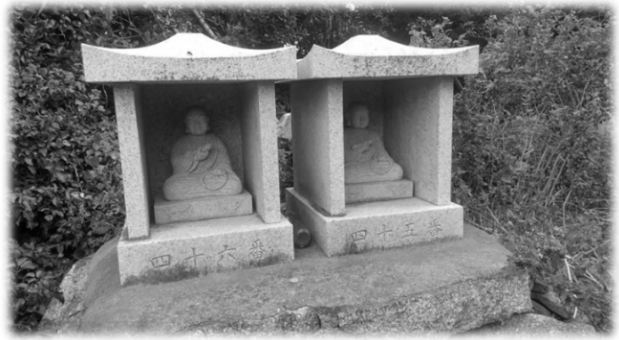


写真5. 大津島遍路（著者撮影）

### Ⅲ. 大津島の概要

大津島は周南市の徳山港から10kmほど西南沖に位置する島である。大島半島とともに徳山港を囲うような形で徳山湾を形成している。南北に約6.5kmのびる形をしており、面積は4.73km<sup>2</sup>である。大津島は今では地続きになっている馬島と併せて本島とし、周囲に横島、樺島、五ツ島、洲島の付属島がある。島の北部から近江、瀬戸浜、刈尾、本浦、天ヶ浦、馬島、柳ヶ浦の7つの集落が存在する。島の一部が瀬戸内海国立公園に含まれており、また回天記念館周辺などの区域が大津島自然公園に指定されている。

大津島地区はかつて富田郷に属しており（このころ大津島の区域は上の5島のほか黒髪島の一部とその付属島の蛙島を含んだ）、明治維新後の大小区制でも富田村とともに第7大区第16小区であった。明治12年（1879年）の郡区町村編制法の施行によって一旦大津島として独立したが、明治17年（1884年）より福川村・夜市村と連合し一行政区をなした。しかし、明治22年（1889年）の町村制施行の際に三村の歩調が合わず、大津島村として歩むことになった。大津島村は昭和19年（1944年）に徳山市に編入するまで存続した。

『徳山市史』によると、慶長15年（1610年）の検地帳では屋敷は7軒のみで馬島ほか付属島には定住者は無かったが、次第に人口は増加し元文5年（1740年）には83戸、明治19年（1886年）には農家数で300戸弱にもなったという。大津島は四方を海に囲まれており産業として漁業は重要であるものの、平地が少ない地形にも関わらず農業が主たる産業であった。しかし、耕地の狭小さのため余剰の労働力を地区外に出し、食糧・賃金を得る必要があった。川のない島であるため稲作には不向きで田はわずかしかなかく、山の頂上まで段々畑を開いても人口を支えるには十分でなかったという。米麦のほかサツマイモ（甘藷）が主要な農産物であったが、昭和に入ってからにはタバコの栽培もおこなわれた（徳山市史編纂委員会、1985）。

また、大津島は島の東に位置する黒髪島とともに良質な御影石の産地でもあった。瀬戸浜地区には現在でも大阪城築城

の際の残石が残されている。江戸時代には採石は免許制であったが維新後に企業化され、採石業は紆余曲折ありながらも現在に続いている。国会議事堂の石材には黒髪島のものが使用されている（徳山市史編纂委員会，1985）。

「山口県中山間地域づくりビジョン」に基づいて、周南市は地域振興 5 法により公示された地域・区域と農林水産省の

農業地域類型区分による山間農業地域・中間農業地域に該当する地域を中山間地域と定義している。周南市においては、大津島、須金、中須、須々万、長穂、向道、和田、八代、高水、三丘、鹿野の 11 地区が該当するが、大津島は離島振興法に公示された地域として周南市の中山間地域となっている（山口県総合企画部 中山間地域づくり推進課，2018）。

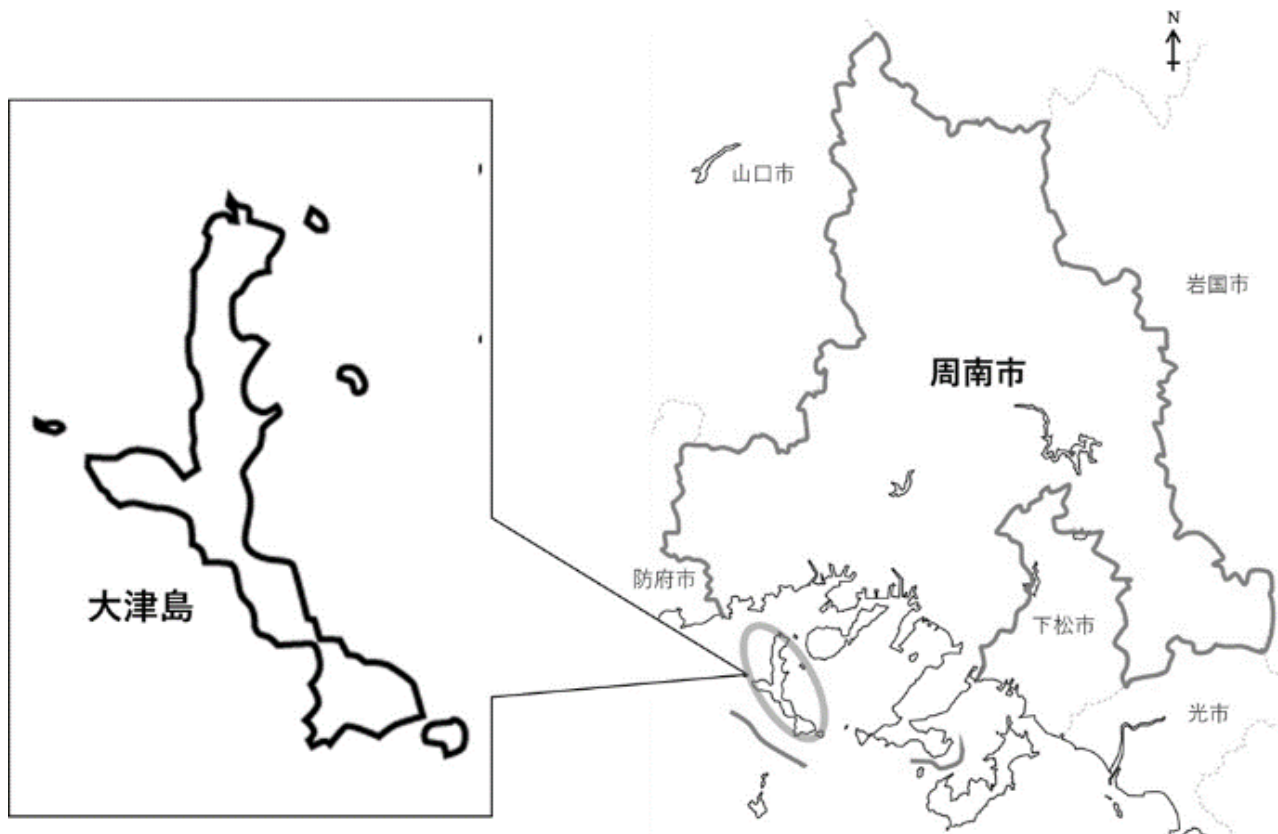


図 1. 大津島の位置（寺田作成）

表 1. 大津島の人口

		1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年
総数	人口	1617	1342	1149	923	796	647
	世帯数	464	447	433	406	372	340
	世帯人口	3.48	3.00	2.65	2.27	2.14	1.90
15～64歳	人口	984	846	716	569	456	327
	比率	60.9%	63.0%	62.3%	61.6%	57.3%	50.5%
65歳以上	人口	234	229	266	258	279	287
	比率	14.5%	17.1%	23.2%	28.0%	35.1%	44.4%
		2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2023年
総数	人口	536	459	361	244	182	186
	世帯数	302	269	221	158	120	138
	世帯人口	1.77	1.71	1.63	1.54	1.52	1.35
15～64歳	人口	199	139	95	55	45	34
	比率	37.1%	30.3%	26.3%	22.5%	24.7%	18.3%
65歳以上	人口	317	303	259	185	136	148
	比率	59.1%	66.0%	71.7%	75.8%	74.7%	79.6%

（出典：寺田作成。1970～2020年の数字は国勢調査のもので周南市（2023a：6）より抜粋。

2023年の数字は9月30日時点での住基人口で周南市（2023b）を用いた。）

周南市の他の中山間地域と同様に、大津島も継続的な人口減少にさらされている。大津島の人口は1950年の約2500人をピークに一貫して減少し続けており、2022年6月現在は146世帯197人である。人口減少に伴い伝承の担い手となるはずの子どもも減り続け、大津小学校（本浦）と馬島小学校（馬島）は人口減のため統合し大津島小学校になった。大津島中学校（本浦）は大津島小学校の併設となり馬島に移転したが、在校生不在のため2015年に休校した。その大津島小学校も2016年から在校生不在により休校となっている。

伝承の担い手となるはずの子供世代が減少している状況である。

#### IV. 考察

以上のような背景を持つ大津島の文化について島民へのインタビュー調査を行った。特に学童期の子どもの居住していない大津島の子ども文化である「わらべ歌」を調査した。

「わらべ歌」は古くから子どもたちの間で歌われてきた歌であり、また、子どもに歌ってきかせる歌のことである。「わらべ歌」はその他の文化と異なり、子どもが伝承の主体であり、子どもがいない（少ない）と伝承しえない。そのため、子どもが少ない島嶼部・中山間地域共通の課題となることが多いといえる。

さて、大津島「わらべ歌」として以下のようなものがあがった。ただし、本わらべ歌を知っていたのは主に80以上の高齢住民だけであり、現在の子どもにまで継承されているわけではない。

ズネーゴ ズネーゴ 茶を沸かせ  
アーンニ ととが戻った  
アーンニ かかが戻った  
ひょうたんやまに 押し込んだ。

##### 1. 歌意

まず、これが大津島固有のわらべ歌かどうかを検討しなければならないだろう。

歌の意味は以下黒太字である。

ズネーゴ ズネーゴ 茶を沸かせ  
**ズネーゴ（方言：小麦畑に生える雑草、お茶として飲むこともあった）を使って茶を沸かせ**  
アーンニ ととが戻った  
**あそこに父さんが（漁から）戻ってきた**  
アーンニ かかが戻った  
**あそこに母さんが（漁から）戻ってきた**

ひょうたんやまに 押し込んだ。  
(舟で) ひょうたんやま (の端を) 折り返した

漁に出ていた両親が舟で戻ってきた様子が浜にいる子どもたちから見え、お茶を沸かして両親を迎える準備をしている様子である。

#### 2. 地理的・地形的観点

歌の中に出てくる「ひょうたんやま」であるが、大津島（馬島）で地元の住民に通称「ひょうたん山」と呼ばれている場所がある。この場所は「IV. 1. 歌意」で述べたように舟が折り返してくるような様子を砂浜からみることができる場所であった（写真6）。



写真6. ひょうたんやまと海



写真7. ひょうたんやまと舟を同時に確認できる位置  
(GoogleMapより)

写真7の下向き白矢印が、ひょうたんやまと舟を同時に確認できる砂浜の位置である。また、右斜め下方向への線がわらべ歌が想定している視線方向である。

同様の地名「ひょうたんやま」「瓢箪山」を持つ場所を「国土地理院地図GSI」(<https://maps.gsi.go.jp/>)を活用したところ全国で9件のヒットがあった。このうち、1件（青森県おいらせ町）は「ひょうたん」ではなく「瓢（ひょう）」、2件（石川県白山市）は「瓢箪（ふくべ）」と読むため不適であった。その他の6件（大阪府東大阪市3件、滋賀県近江八幡市1

件、愛知県名古屋市2件)は、近隣に海がなく、歌意にそぐわない。

ただし、国土地理院の把握できていない地元のみを通称で「ひょうたんやま」と呼ばれている場所はありうるため、このことのみをもって歌の中に出てくる「ひょうたんやま」が大津島の山と限定することはできない。

### 3. 産業構造の一致

次に産業構造について確認していきたい。「Ⅱ. 大津島の概要」でも一部記述したが、大津島は「半農半漁」の住民が多かった(写真3)。島嶼部ということもあり、水源の確保が難しかったため、農業では麦・甘藷の栽培が多かった(徳山市史編纂委員会、1985)。わらべ歌の中に出た「ズネーゴ」は麦栽培の際に生える雑草であり、小麦栽培の盛んな大津島の状況に合致する。併せて、わらべ歌では両親が漁から戻ってくる様子を歌っており、「半農半漁」の大津島の産業構造に合致している。

### 4. 方言

すでに「Ⅳ. 1. 歌意」でも一部述べたが、「ズネーゴ」は大津島の方言であり、「アーンニ」は山口県の方言である。重修本草綱目啓蒙 35巻ではスズメノチャヒキの防州弁として「ヅ子エゴ」の記載がある<sup>1)</sup>。

また、全国方言辞典で調査する限りは他の地域の方言としても掲載されておらず、本わらべ歌は大津島のことばで歌われたものである可能性が高い。

## V. むすびにかえて一地域文化の継承の課題

以上のことから、本歌は、大津島の子ども文化「わらべ歌」である可能性が高いといえる。しかしながら、先にも述べたように、本わらべ歌は現高齢者までにしか継承されていない。「Ⅲ. 大津島の概要」でも述べたように、人口減少と少子化(学齢期の子どもがいない)状況にあつては子ども文化の継承は難しい。

今後は、大津島のような子どもの少ない地域(島嶼部や中山間地域)での文化の継承についてはデジタルアーカイブを含めたICTを活用していく必要があるといえる。現在本稿対象のわらべ歌についてはデジタルアーカイブ化に向けて譜面起こし、録音等を進めているところである。

大津島出身の郷土史家・田中賢一氏に当該わらべ歌を歌唱・録音いただいたものを、寺田が譜起こししたものが図2である<sup>2)</sup>。出だしからの一節は語りのように聞こえ五線譜上には乗らない歌い方であったため、この図に起こされた音程は暫定的なものである。この録音に対して、別の地域住民

# ズネーゴの歌

大津島わらべ歌

♩ = 110

ズネーゴズネーゴちゃをわか せ

5  
あーん に とう とは もー どっ た

9  
あーん に かあ かは もー どっ た

13  
ひょう たん やー まに おしこん だ

図2. 譜起こしの試案(寺田作成)

の記憶では少し違う印象もあるという反応もあった。正確を期すにはさらに複数名からの聞き取りが必要である。上述のように、わらべ歌と言いつつも子供への伝承は事実上なされておらず、記憶している住民も後期高齢者ばかりとなっている。他のわらべ歌も含めて、記録に留める作業が急がれる。

終閲覧日 2023年11月1日)

### 【謝辞】

本研究は郷土史家・田中賢一先生、大津島ふれあいセンターの松本千恵子様のご協力がなければ完成しませんでした。

採譜にあたっては、さらに BeauTone ピアノライフ

(<https://coconala.com/users/692858/>) 様にもご助力いただきました。ここに深謝の意を表します。

### 【註】

- 1) 見明・岡・三宅 (1999) の「スズメノチャヒキ」の項目に防州方言として「ズネエ」ないし「ズネエゴ」が本草網目啓蒙に見られるという記述がある。これをもとに国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>) を用いて『重修本草網目啓蒙』を確認した。なお、見明・岡・三宅 (1999) では「カラスムギ・チャヒキ」の項目にも「じねいご (徳山)」「ずねんごう (各地)」という記述がある。
- 2) 図2の楽譜は寺田が聞き取ったものをベースに、BeauTone ピアノライフ (<https://coconala.com/users/692858/>) に依頼し採譜したものを合わせて作成した。

### 【参考資料】

- ・『重修本草網目啓蒙』35巻，作者・出版社なし
- ・徳山市史編纂委員会 (1985) 『徳山市史 下巻』徳山市。
- ・中川明子・木村未希・西山翔太郎 (2010) 「周南市大津島の戦争遺産に関する研究」『徳山工業高等専門学校研究紀要』34巻，pp.13-23。
- ・前田稜汰・牛島朗・孔相権・濱定史 (2021) 「石柱の形態的特徴と分布：大津島における石柱構造物の研究 (その1)」『日本建築学会中国支部研究報告集』44巻，pp.645-658。
- ・見明長門・岡国夫・三宅貞敏 (1999) 『山口県の植物方言集覧』里山自然誌の会。
- ・周南市 (2023a) 「大津島離島振興計画 山口県離島振興計画・市町計画 (計画年度：令和5年度～令和14年度)」
- ・山口県総合企画部 中山間地域づくり推進課 (2018) 「山口県中山間地域づくりビジョン 人口減少社会を生き抜く中山間地域の実現～いつまでも安心して暮らし続けられる中山間地域を目指して」山口県。
- ・周南市 (2023b) 「市の人口」，周南市ウェブサイト，<https://www.city.shunan.lg.jp/soshiki/20/2604.html> (最